

四条金吾殿御書

建治四年一月二五日 五七歳

鷹取たかとりのたけ・身延しんのたけ・なないたがれのたけ・いいだにと申し、木きのもと、かやの
 ね、いわの上、土の上、いかにたづね候へどもをひて候ところなし。されば海うみにあらざ
 ればわかめなし、山やまにあらざればくさびらなし。法華經ほっけきやうにあらざれば仏ぶつになる道みちなかり
 けるか。これはさてをき候ひぬ。なによりも承うけたまわりてすゞしく候事は、いくばくの御
 憎にくまれの人の御出仕ごしに、人ひとかずにめしくせられさせ給ひて、一日二日ならず、御ひま
 もなきよし、うれしさ申すばかりなし。えもんえもんのたいうのをやをに立ちあひて、上の御一
 言ごんにてかへりてゆりたると、殿とののすねんが間まのにくまれ、去年こぞのふゆはかうときときしに、
 かへりて日々の御出仕ごしの御ごとも、いかなる事ことぞ。ひとへに天あまの御計ごけいらひ、法華經ほっけきやうの御力ごりき
 にあらずや。其の上かみ円教房えんけうぼうの来たりて候ひしが申し候は、江馬えまの四郎殿しやうだんの御出仕ごしに、御
 ともとものささぶらひ二十四五にじゅうよ、其の中にしうしうはさてをきたてまつりぬ。ぬしのせいといひ、
 かかを・たましひ・むまむま・下人げにんまでも、中務ちゆうむのささえもんえもんのじゃう第一だいいちなり。あはれをとこ
 やをとこやと、かまかまくらわらはははつじぢぢにて申しあひて候ひしとかたり候。

これにつけてもあまりにあやしく候。孔子こうしは九思一言きゅうしごん、周公旦しゅうこうたんは浴する時は三度に
 ぎり、食する時は三度はかせ給ふ。古いにしえの賢人けんじんなり、今いまの人ひとのかゞみなり。されば今度
 はことに身みをつつしませ給ふべし。よるはいかなる事ことありとも、一人ひとりそとへ出でさせ給
 ふべからず。たとひ上かみの御めし有りとも、まづ下人げにんをごそへつかわして、なひなひ一定
 をききさだめて、はらまきをきて、はちまきし、先後左右せんごうさゆうに人をたてたて出仕しし、御所ごしよの
 かたわらに心よせのやかたか、又我がやかたかに、ぬぎをきてまいらせ給ふべし。家へ
 かへらんには、さきさきに人を入れて、とのわきわき・はしのしたした・むまやのしりしり・たかどの一
 切せきくらきところをみせて入るべし。せうまうせうまうには、我が家かよりも人ひとの家いへよりもあれ、たか
 らををしみて、あわてあわて火かをけすところへ、つとよるべからず。まして走り出づる事
 なかれ。出仕しより主ぬしの御ごともして御かへりの時は、みかどより馬うまよりをりて、いとまの
 さしあうよし、はうぐわんに申していそぎかへるべし。上かみのををせなりとも、よに入り
 て御ごともして御所ごしよにひさしかるべからず。かへらむには、第一だいいち心にふかきえうじんある
 べし。ここをばかならずかたきのうかううところなり。人ひとのさけたばんと申すとも、あ
 やしみて、あるひは言をいだし、あるひは用もちひることなかれ。また御ごをとどどもには常
 便べんのよしあるべし。つねつねにゆぜゆぜにざうりのあたいなんど心あるべし。もしやの事

のあらむには、かたきはゆるさじ。我がためにいのちをうしなはんずる者ぞかしとをば
して、とが^{とが}ありとも、せうせうの失^失をばしらぬやうにてあるべし。又女^女るひはいかなる
失ありとも、一向に御^{教訓}けうくんまでもあるべからず。ましていさかうことなかれ。涅槃
経に云はく「罪極めて重しと雖も女人に及ぼさず」等云云、文の心はいかなる失ありと
も女のとが^{とが}ををこなはざれ。此賢人なり、此仏弟子なりと申す文なり。此の文は阿闍世
王の父を殺すのみならず、母をあやまたむとせし時、耆婆^{ぎば}・月光^{がっこう}の両臣がいさめたる経
文なり。我が母心ぐるしくをもひて、臨終までも心^{女弟}にかけしいもうとともなれば、失を
めんじて不便^免といふならば、母の心やすみて孝養となるべしと^深ふかくをばすべし。他人
をも不便といふぞかし。いわうや、を^{舎弟}とをとどもをや。もしやの事の有るには一所にて
いかにもなるべし。此等こそとゞまりあてなげ^歎かんずれば、を^思もひでにとふかくをばす
べし。かやう申すは他事はさてをきぬ。双六^{すごろく}は二つある石はかけられず、鳥は一つの羽
にてとぶことなし。将門^{貞任}さだたふがやうなりしいふしやうも一人にては叶はず。されば
舎弟^{るうどう}等を子とも郎^打等ともうちたのみて^侍を^在はせば、もしや法華経もひろませ給ひて世に
もあらせ給わば、一方^{方人}のかたうどたるべし。

すでにきやうの^京だいいり・院^{内裏}のごそ・かまくらの御所^{御所}並びに御うしろ^{後見}みの御所、一年が
内に二度正月と十二月とにや^{焼失}け候ひぬ。これ只事にはあらず。謗法の真言師等を御師と
たのませ給ふ上、かれら法華経をあだみ候ゆへに、天のせめ、法華経^{じゅうらせつ}・十羅刹の御い
さめあるなり。かへりて大さんげ^{懺悔}あるならばた^助すかるへんもあらんずらん。いたう天の
此の国ををしませ給ふゆへに、大いなる御いさめあるか。すでに他国が此の国をうちま
きて国主国民を失はん上、仏神の寺社百千万がほろびんずるを天眼^{みお}をもって見下ろして
なげかせ給ふなり。又法華経の御名^{優優}をいういうたるものどもの唱ふるを、誹謗正法の者
どもがをどし候を、天のにくませ給ふ故なり。あなかしこあなかしこ。今年^賢かしこくし
て物を御らんぜよ。山海空^{くうし}市まぬかるゝところあらばゆきて今年はすぎぬべし。阿私陀^{あしだ}
仙人が仏の生まれ給ひしを見て、いのちををしみしがごとし、をしみしがごとし。恐々
謹言。

正月二十五日

日 蓮 花 押

なかつかさ
中 務 左 衛 門 尉 殿